

授業のつながりを意識した小中連携の充実

【越谷市教育委員会】

1 中学校、第1学年、国語

2 ねらい 小学校から中学校への滑らかな接続を推進することで学力の向上を図る。

3 取組内容

本校に入学してくる児童の実態を把握し、実態に応じた適切な指導を充実するために、①お互いの学校の研究課題を知り、教員間の連携を図った。②学区内の小中相互の研究授業を参観した。③3校合同研修会を開催した。④中学1年生が小学6年生の授業に参加した。⑤中学校の教員がゲストティーチャーとして小学校で授業を行った。ここでは、特に国語科で取り組んだ生徒や教員の連携について紹介する。

(1) 中学1生による小学6年生の授業への参加

中学校1年生の生徒が、小学校の土曜参観の際に、宮澤賢治「オツベルと象」の発展学習として、作品紹介と賢治の生涯や思想について調べたことを発表した。また、発表するだけでなく、小学校6年生が「やまなし」の初読の感想を書いた際に、アドバイスをした。さらに、事後の学習として小学生が授業後に書いた「やまなし」の推薦文を届けてもらい、小学生に対して感想を書いた。



(2) 中学校教員によるゲストティーチャー

第6学年『やまなし』において小学校でゲストティーチャーとして参加した。宮澤賢治の生涯と作品についての逸話を紹介するとともに、宮澤賢治独特のオノマトペや、中学校第1年生においても『オツベルと象』が取り扱われることにも触れた。また、第5学年の夏休みの読書指導において、ゲストティーチャーとして訪問し、宮澤賢治について紹介した。宮澤賢治が農業に携わっていたことが、作品の背景として反映されている点などに触れた。



4 成果と課題

成果としては、(1)の「中学生が小学校を訪問したこと」については、「オツベルと象」の単元の見通しをもたせる場面で、小学生に作品紹介をすることなど相手意識をもたせた授業を行うことができた。また、生徒は同じ宮澤賢治の作品を学習するにあたり、小学校6年生と現在の自分の感想やものの考え方を比較して考えることができた。(2)の「中学校教員によるゲストティーチャー」では、中学校教員が小学校を訪問する前に、小学校の学習指導要領を改めて読み込んだことや、小学校高学年の児童の実態を自らが授業をしながら把握することができたことなどが挙げられる。また、平成21年度、22年度に国語科で取り組んだ宮澤賢治の授業では、小学校6年生の感想として「早く中学校で宮澤賢治の作品を読みたい」「中学校の先生と話すことができ安心した。早く中学校に行ってみよう」という意見が寄せられ、いわゆる「中1ギャップ」解消への一助となることが予想される。さらに、小学校と中学校にそれぞれ兄弟を通学させる保護者にとって、「地域の学校が連携している」という安心感と学校教育への関心と理解を喚起するきっかけとなっている。

加えて、小学校と中学校の雰囲気を理解した上での学校職員同士の交流も成果として挙げられる。

課題としては、(1)(2)いずれの取組についても当日に至るまでの日程や内容について綿密な打合せが必要であった。これについては、本市では、一人一台の校務用パソコンを利用し、メールで直接連絡調整を行うことができた。また、中学生が授業へ参加することについては、事前のリハーサル必要であること、平日の実施は難しいため土曜参観などを利用しなければならないことなどが挙げられる。さらに、系統性を意識した単元の設定や、実施時期の調整にやや改善の余地があるように推察される。これについては、計画的な授業交流を推進するとともに、担当者同士のさらなる緊密な連絡が必要である。